



「ボタニカ」を読んで

朝井まかて著 祥伝社刊

植物分類学者 牧野富太郎博士の本文 494 ページの伝記である。

小学校しか出ていないのに東大の先生になり、博士号も得られた方と言うことで、名前は子供の頃に聞いたことがあった。学歴がないのは、寺子屋や藩校で学んだ知識があり、「学校の先生の言われることが分かっていることばかりだから」行ってもしょうが無いと言う理由で学校へ行かなかったためだった。

牧野富太郎は 1862 年、現在の高知県佐川町に生まれた。子供の頃から野山の植物の名前を調べるのが好きであった。植物の採集、標本作り、細密描写にのめり込んだ。植物分類学という分野があることを知り、外国人のその道の権威に資料や細密画などを送り、名前の同定をして貰うなど独学で研究を進めた。その研究のためには、書籍を次から次へ購入、遠方への植物採集のための出張など費用のことを考える事は無かったため、ついには相続した「岸屋」という造り酒屋を潰してしまった。それでも尚植物学のために欲しいものは直ぐに買うことは生涯止められなかった。

独学で進めた植物採集、標本作成、細密描写など熱意と実績が認められて東大の研究室に出入りし資料を参照させて貰う等して居るうちに学会誌の編纂などにも関わり、自分の満足出来る描画の印刷のために印刷機を購入し自分で印刷技術を習得する等出費も労力も惜しまなかった。しかし、東大の学生でも職員でもないことから、文献、資料を閲覧する等で学内に出入りすることを禁止される事態にも遭遇した。その後教授が変わり助手として採用され、また出入りを許されるようになった。

植物学のためにはと、植物図鑑の編纂も始め、金に糸目をつけずに己の欲するままにはまり込んでゆくうちに、莫大な借金でニッチもサッチも立ちゆかなくなり、標本 10 万点を海外に売却しようとした時、朝日新聞が世界的業績を外国に渡さぬため、その窮状を記事にして訴えた。その時、買いたいと申出た 2 人の中に、日立鉱山創業者の久原房之助氏の名前が出てきた。結局は、神戸の資産家が買い取りその標本を牧野富太郎氏に寄贈すると言うことで救うことになったと言うエピソードが書かれていた。私は先般「鉱山を源流とした日立市の発展」と言うスケッチ展に関わったことから、久原房之助氏の名前で身近に感じるものがあった。

論文発表や講演など実績を積み重ねていることから、学会でも放置できず 1927 年博士号を与えた。新種の発見も多々あり、命名した植物は 2,500 種にも及び、自ら発見した新種が 600 種以上も登録されているとのことである。図鑑、図譜の発行は 6 編、論文、雑誌を多数発行する等生涯を植物分類学に捧げられた。

画期的な業績は、このような奇人変人と言われる人の異常も思われる努力によって達成されるものであることがよく分かる伝記だった。